ジョン・ダンの著作における身体の表象に関する研究

Nara Women's University

人文科学系・言語文化学領域　**奥西　豊子**　助教　OKUNISHI Toyoko　博士(文学)(奈良女子大学)

■研究キーワード　英文学／Early Modern English Literature／近代英国の文学・社会・思想

■主な所属学会　日本英文学会／十七世紀英文学会／日本スペンサー協会／日本中世英語英文学会

■研究者総覧　https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.4ced1c3ebce5f756520e17560c007669.html

研究者総覧

研究概要

16～17世紀の英文学、特に「詩人の中の詩人」とも言われるエドマンド・スペンサー（1552?-1599）と代表的形而上詩人とされるジョン・ダン（1572-1631）の著作を、文学的モチーフや図像的表現に注目して研究しています。現在は、ダンの著作のうち、他者の死を悼む哀悼詩、葬送説教と、ダン自身の病について記録した書簡、『危篤時の祈祷』（1624）において身体をいかに描いているかを分析しています。

カトリックの家系のジョン・ダンは、世俗での出世を目指すも、紆余曲折を経て英国国教会の聖職者となった人物です。ダンの初期の恋愛詩から後年の説教に至るまで、彼が残した幅広いジャンルの作品において「身体（body）」は主要なトピックの一つであり続けたことが指摘されています。ダンの「身体」への関心は、時代の動きとも噛み合うものです。諸分野で大きな変化があった近代初期において、「身体」は、神学や哲学、医学の著作に限らず、政治的な議論でも取り上げられる対象であったほか、身体を通じた経験、特に痛みは、宗教詩や恋愛詩でも重要なテーマだったと近年の研究で指摘されています。

研究では、死や病を扱ったダンの著作を分析の対象とし、文学的・宗教的・伝記的背景に照らしながら、ダンが身体に生じる変化を、詩的比喩として用い、また宗教的に読み解いていることを明らかにし、ダンの身体観を解き明かすことを目標としています。

ジョン・ダンの肖像画、当時出版された書籍、現存する書簡に基づくイラスト（奥西豊子）

アピールポイント

16～17世紀の英文学と聞くと、現代の日本人には地理的・時間的に縁遠い分野に聞こえるかもしれません。しかし、これらの時代の文学は “early modern English literature” と呼ばれるように「今」の英文学と地続きにあります。そして欧米の思想や文化を取り入れ、語彙・思想を豊かにしてきた日本においても、現代人がシェイクスピアの『ハムレット』に共感できるように、近いところにある文学だと考えています。

ヨーロッパ近代の初期は、ルネサンス、宗教改革、科学の発展など、諸分野で現代につながる大きな変化があった時代であり、変化していく世界観の中で「人間」「身体」「魂」を再定義し「語り直し」をしようとした時代です。現代においては、科学・医学が発展し「人工知能」「仮想空間」が生み出され「人間性」「身体性」の問い直しがなされていますが、その議論に用いられる言葉や枠組みは、初期近代に礎があります。だからこそ、現代の議論の根本に関わる、初期近代の言説を今の視点で読み直すことが重要だと考えています。

「身体」に関わる言説は、学術的な議論になりうると同時に、己の身体・感覚に関わる身近なものでもあります。ジョン・ダンは、恋愛詩から諷刺詩、宗教詩、政治的・宗教的な散文の論考、説教に至るまで幅広いジャンルで、それぞれのジャンルに即した「表現」や学術的な「言葉」も用いつつ、繰り返し「身体」を扱っています。他者の死、自身の病と死を扱った著作において、ダンがどのように「身体」を書き表したかの分析は、作品・作者を読み解くだけでなく、初期近代の思想の研究でもあり、ひいては現代に生きる我々の言葉を問い直し、言葉によって形作られる思想をより深く理解することにつながる探求でもあるのです。